

甲州印伝

甲州印伝は、江戸時代末期に、現在の山梨県の甲府市にあたる地域を中心に産地が形成された鹿革に漆で模様を付けた伝統工芸品です。

鹿革は、手に馴染む柔軟性と強度を備えていることから武具にも使われ、戦国時代には、燻（ふすべ）や更紗（さらさ）技法を用いた鎧や兜が武将たちの勇姿を飾ってきました。現在は、お財布、印鑑ケース、ハンドバッグなど、現代の生活様式にあった様々な用途に使われています。



作業工程

1： 鹿革の染色

白い鹿革を黒、紺、茶色などに芯染め（ずぶ染め）します。1回のドラム染色で百枚単位を染めます。鹿革は一頭ごとに性質が異なるため、染色にも多少の差が生じますが、これはむしろ天然素材の持ち味であるといえます。

2： 裁断

一枚革を型紙に合わせてカットします。

3： 柄付け

鹿革の上に漆で細かい柄をつけていきます。鹿革の上に型紙をおき、その上から漆をのせたヘラを横に刷り込むようにし、型紙から革をはがすと、鹿革に抜き柄通りに美しい文様が浮かび上がります。これを数日間かけて乾燥させると、硬質な輝きの漆柄が仕上がります。



漆を使った技法のほかに、鹿革を煙でいぶして染める「燻技法」、顔料で柄をつける「更紗技法」もあります。

4： 縫製・仕上げ

型紙に合わせて正確に裁断した後、ひとつひとつ丹念に縫製します。つぎに、ハンマーで縫い目の折返しを整えます。そして口金やファスナーをつけて仕上げます。

画像引用元：株式会社印傳屋 上原勇七

地域の鹿革を使った印伝（URUSHINASHIKA）

従来、甲州印伝では、柔らかさに特長のある外国産の鹿革（キョン）が使われてきていますが、山梨県では、官民が一体となったプロジェクトにより、山梨県内で捕獲されたニホンジカの革による印伝製品ブランド「URUSHINASHIKA（ウルシナシカ）」を立ち上げ、商品展開しています。農林業被害等の対策のために捕獲した鹿を皮まで活用することで、「いただいた命を無駄なく使う」取組となっています。



URUSHINASHIKA

MADE in YAMANASHI

